

# 漁民はもう待てない！1日も早い開門実現を！！

昨年12月、国に対して潮受け堤防の排水門の開門を命じる福岡高裁判決が確定してから、早や8か月あまりが経つ。農水省が開門に向けたプランを実行しない一方で、有明海の漁業被害の状況は一層深刻化しており、「もうこれ以上は待てない」という漁民らの怒りの声は頂点に達している。そこで、あらためてこの半年間の有明海の被害の状況を概観する。

【毎日新聞2011年1月13日】

赤潮真冬の有明海に3季連続、ノリ色落ち不安の声―鹿島・白石沖

佐賀県有明水産振興センターは1日、塩田川河口に近い鹿島白石沖の有明海で赤潮の発生を確認した。12月や1月の真冬にノリの色落ちを起こす赤潮が発生するのは3季連続となる。冷凍網ノリの収穫が本格化する時期にあたり、ノリ養殖業者からは不安の声が上がっている。



昨冬に色落ち被害に見舞われた太良町大浦のノリ養殖業、大鋸武浩さんは「不安でたまらず、このまま

だと冬場の養殖が成り立たない。早く諫干の開門調査を実施してほしい」と語った。

「やはり海がおかしい・・・」

2月に入ると水産試験場などからは「赤潮は終息した」との発表がなされた。しかし島原市の篠塚氏によれば、「やはり海がおかしい」。雨の後、時化で海がかき混ぜられた結果ノリが黒くなったが、赤腐れがかなり酷く、あとの生産ができなくなりそうだ。(2月中旬になっても)色落ちの一部の漁場を除いて拡大している。更に赤腐れやケイソウの繁殖でノリ芽が枯れたようになってきている。これからは色落ちに加えて赤腐れにも注意しなければなりません。相変わらず海水は泥濁りが酷く、一日も早い開門を望みます。」と話す。

【佐賀新聞2011年2月7日】

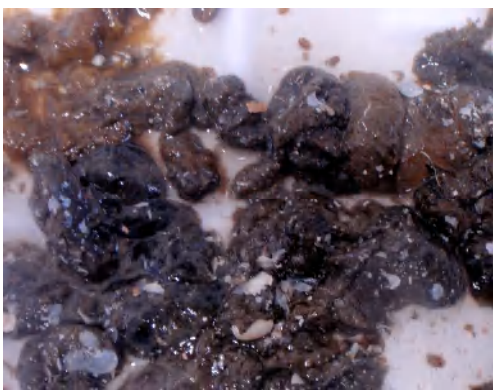
赤潮は1月11日に塩田川河口域など西部海域で確認された後、中・南部まで拡大。1月下旬から縮小傾向にあったが、この間、栄養塩不足を引き起こし養殖ノリの色落ち被害をもたらした。依然として全体的に栄養塩は少なく、水産振興センターも「晴天が続けば別のプランクトンによる赤潮も考えられる。」として注意を呼び掛けている。



## ユスリカや謎の浮遊物の発生

6月1日、東京の高校生ら160人が修学旅行で諫早湾を来訪した。漁師の話しや干拓の歴史などを学んだあと、実際に潮受け堤防を見学した。しかし、潮受け堤防の中央展望台に来たところ、あたり一帯は猛烈な蚊柱で目も開けられない有様。正体はユスリカの大群で、高校生らほとんども見学できる状況ではなく、一目散にバスに逃げ帰った。高圧水による陸橋の洗浄などが行われているが、状況の改善には程遠い。

また、タイラギの成育状況の調査のために海底調査に赴いた潜水士の報告によれば、場所によりホトトギス貝が膝下あたり(約30センチ)



の深さまで積もり重なっていて、タイラギが立つことができない状態とのことであった。5月12日付瑞穂漁協の室田氏の報告では、諫早湾内は最悪の状況で、潮受け堤防からのヘドロの排出だけでなく、諫早湾内の海底のヘドロ状のものも一緒になって流れているということであった。

また、5月19日付諫早市の坂田氏の報告では、小長井沖に謎の浮遊物が大量発生し、漁のために網を入れても、その謎の浮遊物が付着して魚も逃げていくし、漁の後で洗浄が困難なために漁ができない状態であるとのことであった。

さらに、5月には北排水門付近の調整池内で大量のアオコの発生が確認された。これらのアオコの中にはアナベナという有毒な種類も含まれており、注意が必要なことは言う。